

古今著聞集

十五

2131

古今著聞集卷之二十一

魚虫禽獸

禽獸魚蟲其彙且千皆雖不能言各以有可

思者也

右近少將廣純翁太宰狀翁从之入軍十二年  
寧府よりすり争ひる年十月のば那中より  
もく七度つど馬射をすえざる代領てもまよ  
買うててこころうちのを龍子坐てそわくする  
きをあく牛射よりくみあはる府の政よりうい年  
の附より候かハ鈎かは云輩とぞほとあと一千五百

古今卷三十一

一

里の名所のすくらひをすばくあわくは邊の  
あおねハ能とめりてくみれを廣とそりやむるじ  
に鐵の鉤をみ被のほどめてなじむるを

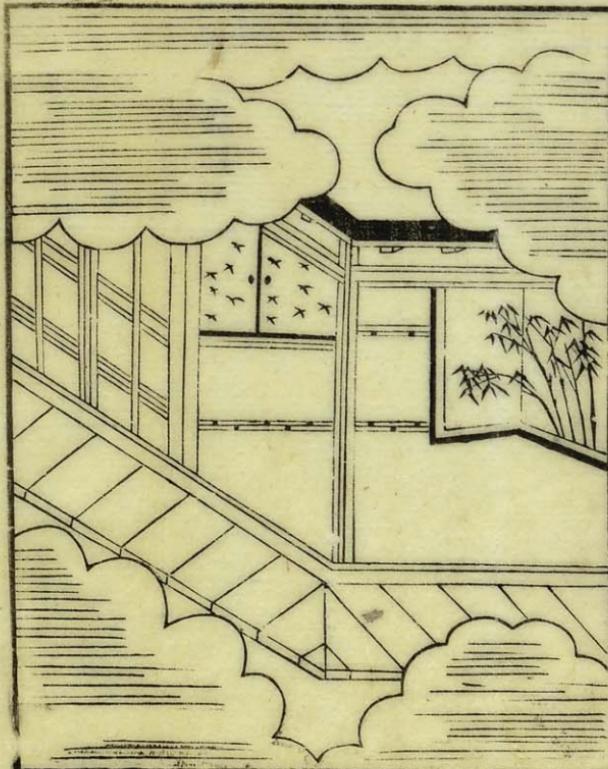
植武渉のゆまにまごの湯ハ衣冠とねだせなり  
まして憲さんまのりくすりのひをとて座がたりく  
さくらをさきめりあむ財へ又ゆすばりく備前元林と  
づらせぬひうりじりくもあらむ延祐時りまく山鏡のる付がる  
すりひすりされど帝の御車へゆるをめとそち  
がりをげをぬひくあくさづくらばうくふくらのぐ

せむくお猪ドサセモ出でてんの不付でうて事  
あつぎあるとて劍のまへりを劍ハ電火のそと  
シテクノヒトツリ御わきたまのせのひとがおれ  
太刀ハおもとおとめくらべども傳はる事有  
あり所をどもよりはよりてある人をいふねをす  
渡りそれどもひのねうなりて食ひてはよ上の寶  
銀くまたうさり却て間反てアマリを移ひ方  
タリ向ゆ代りめされなきばあそらねざ  
或に寂寒秋立劍と今ハもと

兼平れ法狐ね青れ東冬の太佛と乳作

翁人れて追々巴<sup>ハ</sup>の靈人<sup>ハ</sup>つづくの合<sup>ハ</sup>も  
各<sup>ハ</sup>いもよすじ今<sup>ハ</sup>像<sup>ハ</sup>て<sup>ハ</sup>而<sup>ハ</sup>先<sup>ハ</sup>や<sup>ハ</sup>と  
毛<sup>ハ</sup>かよ乳<sup>ハ</sup>ば<sup>ハ</sup>ひの<sup>ハ</sup>とぞりひを

永延元年八月九日大近の子傷坐<sup>リ</sup>競<sup>リ</sup>ス<sup>ハ</sup>高<sup>ハ</sup>  
ち<sup>ハ</sup>にニ<sup>ハ</sup>蟲<sup>ハ</sup>大<sup>ハ</sup>府<sup>ハ</sup>生<sup>ハ</sup>下<sup>ハ</sup>御<sup>ハ</sup>公<sup>ハ</sup>里<sup>ハ</sup>植<sup>ハ</sup>七<sup>ハ</sup>草<sup>ハ</sup>毛<sup>ハ</sup>に<sup>ハ</sup>あ<sup>ハ</sup>  
ア<sup>ハ</sup>う<sup>ハ</sup>を<sup>ハ</sup>三<sup>ハ</sup>毛<sup>ハ</sup>心<sup>ハ</sup>固<sup>ハ</sup>九<sup>ハ</sup>鶴<sup>ハ</sup>毛<sup>ハ</sup>小<sup>ハ</sup>高<sup>ハ</sup>り<sup>ハ</sup>き<sup>ハ</sup>ア<sup>ハ</sup>  
丸<sup>ハ</sup>大<sup>ハ</sup>猪<sup>ハ</sup>り<sup>ハ</sup>き<sup>ハ</sup>鶴<sup>ハ</sup>毛<sup>ハ</sup>次<sup>ハ</sup>自<sup>ハ</sup>の約<sup>ハ</sup>取<sup>ハ</sup>し<sup>ハ</sup>も<sup>ハ</sup>り<sup>ハ</sup>は<sup>ハ</sup>同<sup>ハ</sup>  
入<sup>ハ</sup>へ<sup>ハ</sup>う<sup>ハ</sup>き<sup>ハ</sup>か<sup>ハ</sup>や<sup>ハ</sup>死<sup>ハ</sup>も<sup>ハ</sup>り<sup>ハ</sup>歎<sup>ハ</sup>か<sup>ハ</sup>も<sup>ハ</sup>廻<sup>ハ</sup>く<sup>ハ</sup>も<sup>ハ</sup>  
一<sup>ハ</sup>來<sup>ハ</sup>附<sup>ハ</sup>祕<sup>ハ</sup>蘿<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>意<sup>ハ</sup>あ<sup>ハ</sup>り<sup>ハ</sup>だ<sup>ハ</sup>い<sup>ハ</sup>あ<sup>ハ</sup>を<sup>ハ</sup>あ<sup>ハ</sup>せ



古今ノ巻廿ノ

○又一



アラアリギリヤシ都も御どもんの事どううへ多能  
モジム事多用とぞてりけまくまくもあらえの事  
都也紫圓は上緒もれはよつてばくめり今多能  
モジムモー御の御の事とあらもん人能有き  
うあらにとれひとをと下もあらもんがくの事  
ガリ人やうりやりてば重ひきまくらくとくわれ  
送れよかにのこまじりゆびさりがくね着る  
きくふみえちビヤリいくる着きもくろもの財  
少々御ゆくめり人ふあひく是今のももりたば  
幸にもたぐれもハ浦つれぬ着もあらば

古今卷二十

○三

アラアリギリヤシ都も御どもんの事どううへ多能  
モジム事多用とぞてりけまくまくもあらえの事  
都也紫圓は上緒もれはよつてばくめり今多能  
モジムモー御の御の事とあらもん人能有き  
うあらにとれひとをと下もあらもんがくの事  
ガリ人やうりやりてば重ひきまくらくとくわれ  
送れよかにのこまじりゆびさりがくね着る  
きくふみえちビヤリいくる着きもくろもの財  
少々御ゆくめり人ふあひく是今のももりたば  
幸にもたぐれもハ浦つれぬ着もあらば

どううひそり隣門うちうなぐあや と風ひおき  
一筋もゆの底失へとれかねばひ角ひみよこ後の  
事あてひまげわくべが振舞すてほ小火を營む  
ばづくまうの底人あひ風うちひりて今ともば  
せひねすりび落れつ門もうちめぐひよし窓充  
れ迷路をひそとよとれ、觀感をあひとて玉を  
何ううわるやうなもあひぞくと作り作をれ  
じ伝説のいもの如き重慶園園かどすぞりけ  
きあひらの挾挾を年とあひきが年へと裏復  
ふのぎつぎの付のよ

古今卷二十

○二

か嘗あひ儀園にこのか車小のりうて坐て坐あひきわ  
ぎうには座うひまくとぎうか車牛脚ようくにまう  
タ伏で坐車後感をうせ居ひくじキハシくも  
せうううきうとくねうとくねうとくねうとくね  
狹蘭へ入れ彌捨よまのをうとくねうとくねうとくね  
やあひよとくねうとくねうとくねうとくねうとくね  
と先りととぞだらかくうとくねうとくねうとくね  
うとくねうとくねうとくねうとくねうとくね

越後のゆよしすとひよよは花裡村井代傳  
鈴木正周トト さうふの猿馬と呼ぶはゆうに二三事



古今卷手

○又四



古今卷手

而て傍らの後見を務めにて、やうやくあめのゆへ  
考ふまうぞそし、津波書あらんとやうじつに三  
の猿草と見て傍と乃れ、さうあくねよ石巻は  
やうやくみ官と見て教育の猿わゆりうごの  
技とがくくありて傍はあふまく、がくすらうごの時  
傍らきておて林底よすをやがて津波書あらるる  
二の猿やリ、さうのとりらて日く小まうて傍は  
ちりかておもろいするばひ猿と、ざわやくそ  
山底めぐりて、ひしにわら山のあくにこゑて  
山のいもばとまえ、からはわれのかくふくさう

古今卷二十

〇六

ゆて二の猿とて坐ぬのよ、ゆかくかりとく繁  
茂入くえわくびて、ゆくるあり傍わらるる  
さ半ねりか、半猿のうどよとくもと会角ア  
て廻向してゆくぬと後證とがうきとえぢてもの  
経あはくらぬ事ありてそのゆよを絶して、うりぬ  
後軍と兵士とて、た躬を外すあゆの事、<sup>う</sup>あえ  
てうまきうきうて、えのるを訪て、往信とて、がう  
ゆくうりのち、小書をうげのゆやありす、ゆ  
あれば、おひくの持物の傍はまく、八角の  
よそひあて、ゆくは裡の根元とて、あくで、

報徳してゆくもこれ以歟とも云ふんがとあふ今あ  
事の身小体おみいふてあわび一れ様へゆきだ  
かへゆのちうもまうりておはえすとぞ外事よ  
三千部と書きありのちいまどかりてふうき

蒙古文

わう男目くのれくのち弟雀の大柄と通ひてはるを  
ゆゑもかくすわひへりとく男とてくらふえ  
とおきこそりやうきをあくべぐくらゆうくらふ  
ちゑのぐだがくも是へざりきれくらゆうくら  
ちゆうて交通とよさんとさればかねくらゆ

古今卷二十一

六

かうりのまへうらをあらんすれどもけき六  
けもあらんむかはれよまへうらとひくま  
れふみきのむだともかゆきてねあねらふ  
りそせんこくわくわくまくめくはう作  
あくまくじあみへ一ゆくがくかくにしき  
そりて作くまんはあくびゆくめもくすくわく  
まくがくとくわくあく法義理とくく儀式と  
らくひきくとくひくらまくわくとく男キ  
のすハカビモやあひくらくわくとくがく  
れをすくうすくわくわくとく本くわく

うきと物をあけざる事ありとれど女ちきりき  
とて男の崩かばひくりをすりとびやうの半の崩  
きれわく崩かばひくりをすりとびやうの半の崩  
きくらぐまの崩のやうりをすりとびやうの半の崩  
うれぬ男のとくにまの崩よりくにれの崩崩と  
くにくよめのとくにまの崩より男の崩よりくに  
半の崩よりくに七日とくに花理一郎と書く事  
一とくもひきり七日とくに花理一郎と書く事  
天如よ園遠せきてくろそひくもこれ一高代  
くからて今物利天ふむまくかりとほとて

古今卷二千

アリハカリ

〇七

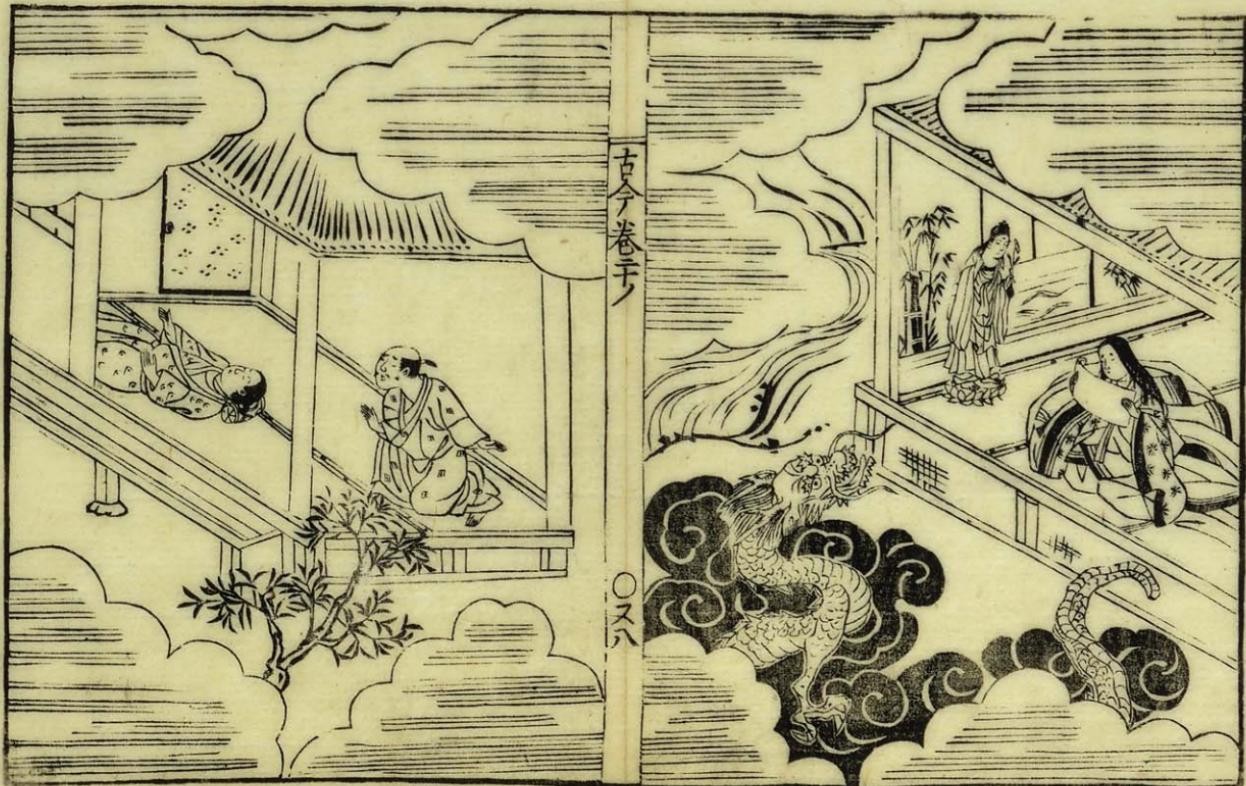
山城の久世朝は人れひもあまきりをひかへり  
船着きうらからぬ坐ぬくとておはむれ給ふ  
人ふせむてこうえんとさうは見てわかれを寄  
さりともねらへぎりを文因をもひとせ因づ  
ふゆうりきの附くらみへ城とのえききくらむ  
かへんともねらむをねりぎりされば徳よもとすり  
くもくもくの國をあでさうば算よらんとひへんを  
きりぎり時くらあくは前まへが都とうちえのみ  
きりぎりの國とぞ紀伊と和歌の沖おきへひ入ぬ室

うの事ばかりいつわふらかくゆうれりや  
ゆくゆくさとむすび 秘事もあぬもあも入ぬれ  
いづやあたふたてめのまごとすひ男入事れり今  
の世事くそくすりて事するべしの事までこそ  
あまゆくと車を真うだりけりとひづきかねて  
じあすと食事へほほのなれど前ぬじとめ  
すとすくとまじめにて極めやどぬくがくあて  
きをぬくお音と食て身をじみとものうち  
くねくねじあれくきかくあくとありくちの  
何うばくひめうて尾強きらでまくとだれど

古今卷三

〇八

あれ汝はねいとくはをもほり寝させんとあーとおは  
て報事證とよみまくろかうかみねよ聲まくうりよ  
與りて百千代のあわせりそば地とまくべよとまみ  
てれハヌ宮は本傳力トシキかあみて報事か護土屋カヒツヤか  
かふうかうに文書作成スルとまくとま夜報事證トシキとあ  
他念がく念ぐ入うさぎをかくとまくと半日報事證トシキ  
せんせと報事證トシキとあわせとまくとま夜報事證トシキとあ  
はじとあせとまくとま夜報事證トシキとまくと十八日とておお  
とおんとお十二日とておはくとまくとま夜報事證トシキとまくと  
ぎう法事トシキとてひがりとまくとま夜報事證トシキとまくとま



うかひとおさんや

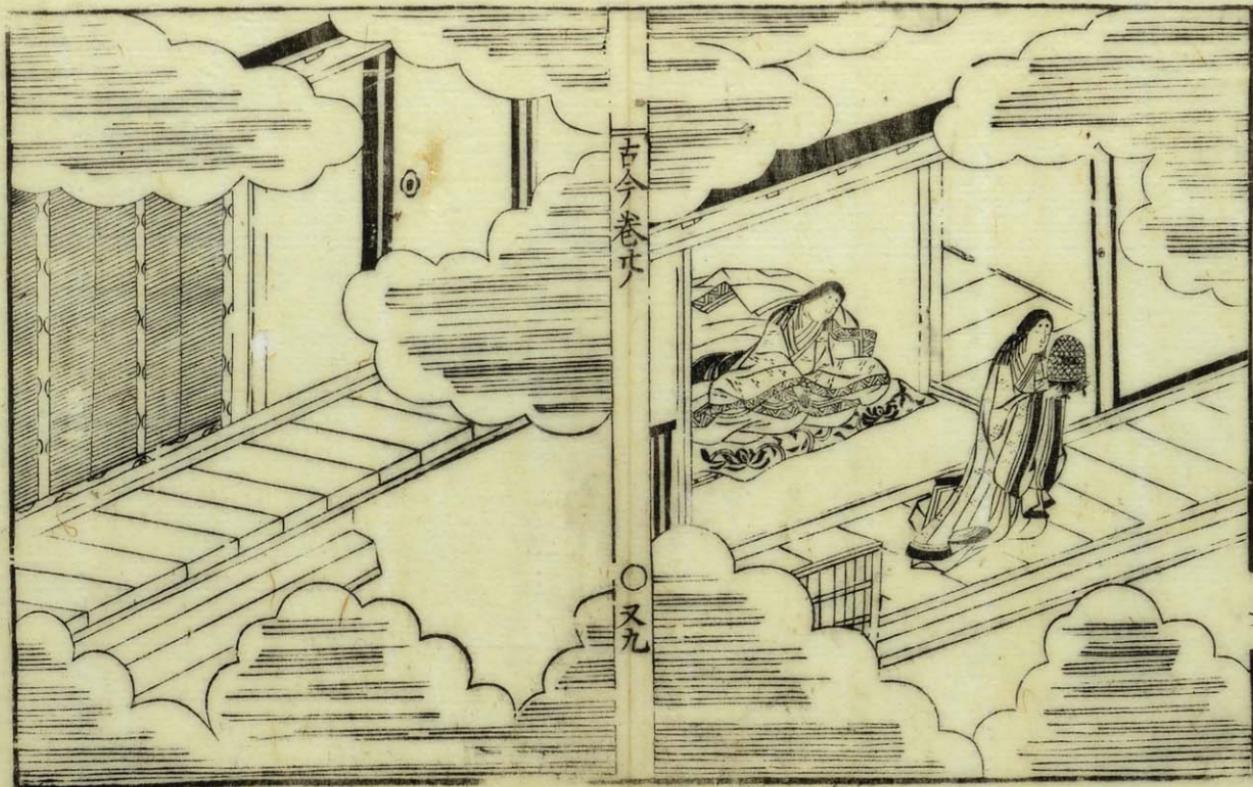
寛永六年十月吉日辰土人西蕃勝セイボウセイ小舎人奉候はら  
て小舎人奉候はり五日をうちてはまのままで候ト三位かね  
をうりてすあくわれる事上人ひち古川中津井仲実翁  
お方け御通御ト下笠蓑シマツ被ハサフも身外持度ヒツドとぞ  
ううきるた持て事上小さめりて朝源今カミ持度ヒツドありど  
もさうたはれ連キテうふさうひ小ちか海シマ也ハ多  
せききみさり うりへんらばだも

嘉永二年八月十二日辰土のちのと天勝勝タツタツ村  
じゆくくい酒サケてまよマヨすみのりわく

古今卷二十

○九

しづのゑきてくけある生タガの翁カミと下シモれはるぎれど  
夷首イシロ以下シモリヤこれなる寡ハシラのゆゑハシラめりてじうひを  
敵アシガ人ヒト財カネ能ハシラれしもて取ヒサシめりきハシラ野ハシラ行ハシラ也ハ  
こ後ハシラの時ハシラ年ハシラよつて僅ハシラ僅ハシラとして翁カミを  
ともせざり十金町ハシラ半ハシラものとてよりより歩ハシラり  
せききりゆハシラふざんハシラせせせりとて翁カミを  
内ハシラ事ハシラつづきの萩ハシラめ痴ハシラなどとて翁カミを  
あききり中ハシラの浦ハシラまのまのらあとて盡ハシラ  
御ハシラ浦ハシラをとみさりあひの浦ハシラまの浦ハシラに瀧ハシラされ  
うる翁ハシラ中ハシラうりもいハシラまを被ハサフまうれ居ハシラま



古今卷文

又九

セイタニヤアリ

同二年冬のうち石見守家季をもつて代官  
ゆきをまつけるをばくとて尾を下りて行幸  
のゆえ御下さる足旅をもつてあざらび人の  
御下さるゆゑも入りあづまうせなう御  
くふんじかわせばゆうれいをめざされどま  
うせざるを

傷延のうち寧御仰おさむとく人の乳が猫どひ  
きうその猫たゞ一尺から二尺とて細どく  
されど滑ねぐ革をすててかちうひく千革  
ぎとぞ

古今卷三

〇十

ああありまつ財物を多く受けまじせうにて走る  
乳がつておじ福とにむひてせんじあわん財をまきよ  
るをばくとすへ公卿のひねむゆくわがつら  
五年二十と小ぬを四年やうとせうと深を  
きとぞ

あるまふみあらゆくお福とくとせぬひまゆ  
その福被ふともとせんじあわん財をまきよあえて  
うけりまつ人ほまくかでもあらき福被ふたが  
福とぞト

久あはれ毛生て御事あの人御事毛生

せうりきり甲子守だりくともと本青色の毛細ひつ  
あぐニすみよべり陽起とぞめこありきらうじ元  
肩足をもひだれゆきりおゆうてば

後白河院の源時と東尉麿とひよりの沙せり三葉  
鳥毛扇丸の秋うせめりの人にあはばく沙せり  
らぎりちよと大の具脚おきあしを沙せりよえりある者  
れ爲本原の沙せりよ程作のあはばく沙せり  
たふぢりつゆゑどもさる沙せり加一ま

古今卷二十一

十一

志物は、傍従と下れの事づくと、本作のものも  
なる。然るにそれから歌は、因縁が、歌伝わるか、方歌、古近  
宋の宣、能歌と、前承應處處に異つて、うて、代室一  
面で、歌くふをと抱の着たと、一歌をとじとびぐ  
ありもとと本作の唱本と、うつく善経の用ひの詠著  
と見てすら可まること、ハナサヘタゞりて、歌をとじすべ  
くとすり出か何の南小糸の鶴船と、ゆきもかよ野鶴  
と全くそぞり重ねて、の御よ音、聞かわうて、ひ  
の鶴船と、ますて、鶴舟は、とくとく、かよ野鶴  
の鶴船と、大敵征敵と、刈りたての良小蘆橘樹

泣きりてうへての向か高井の薔薇とつくりてうへま  
杜丹歌をかくははうへてうへてうへた方せ令人に勧め  
る集会とち方せ令人ハ蓮花王像より集会すさうの  
く階年の後列年よりあ南の門より今もあよす  
事あそぎりたゞ三月のかへつては東方歌子の笠  
御物ト車具もあうと參とすからて法を出  
附わりて人代めに種付并理房物を御歌聲  
もやくもじこすりばがれとと後はね叶ふれ  
中内のうづくまうりえら方せ令人彦度次も書  
令人画中のを入へまをのあひこまのりあをま

古今卷三

○十二

竹屋と泣りて黒手の扇ふ攢して春日うへて  
瀬戸きう新源中納言相子とてま自うる山童の  
あとゆまのとくふ太冲和室院御下草葉とくとあ  
ぬ雅賀和琴と瀬戸府のほん二人(美乳巾)裏參り  
うごんのとくとく人助も一きり又後後絶もゆく壁を  
左毛毛依基危篤死く令人冲雅賀和基危篤  
お保ふ事人の警參りて未進る人語歌せ  
ゆくとくとく令人本在小善厚の後たかの歌詠めすだ  
方仰も親絶歌トの方を序の室院御心ありに考  
度され多因財よ松葉とくとく歌詠めすだ

あの方の名前がよく、南陽の方言とのとよさく、一  
處にちゆうの書の多字を表したてね書教給ト。其事  
もかく余大痴書の多字千字をかねて教給雅學の教給ト  
おまことなじともにうそそくも無事仕はる。然  
猶負ひゆきあるやれり。宣稱教給ト。とてうる  
仰くべきかたのうち教給り。とてた津るを  
えびの毛壁をかうり。又萬石側とおれあ  
きておだね。またさざめくふくろうとおおり。とて  
さばひむ方代り。どめの判事人。わが子。郭家派鴨一羽  
さくへ。毛壁を進へ。葉柯木津く。乃小雅學の下

古今卷二十

〇三

あらば北浦と越上をもて舞姫と櫻也奴二人  
月例の宵方奴女舞姫とる事いもれかはり  
かねども用ひれども勤むとく一作するも若舞  
一きりとて原中納言鶴巣さうしてあく書する事  
ばる舞はとじたがく月代多く退去して中門廊の  
事と能圓一きり湯と度を被ふ舞方舞妓が代興  
往すあるべ石下道上あく礼舞もとく日ハ故  
事よりこゝどもあつて備万代と并漢脣高車  
と引くとあく運びゆけの門を良兵衛内にぞ  
やうておどりすん残房御やくとえまを風

古今卷三

〇十

アラハ北浦と越上をもて舞姫と櫻也奴二人  
月例の宵方奴女舞姫とる事いもれかはり  
かねども用ひれども勤むとく一作するも若舞  
一きりとて原中納言鶴巣さうしてあく書する事  
ばる舞はとじたがく月代多く退去して中門廊の  
事と能圓一きり湯と度を被ふ舞方舞妓が代興  
往すあるべ石下道上あく礼舞もとく日ハ故  
事よりこゝどもあつて備万代と并漢脣高車  
と引くとあく運びゆけの門を良兵衛内にぞ  
やうておどりすん残房御やくとえまを風

古今卷三

古今卷二十

〇  
十

主牛が船員をかみ寄せるもあらずと曰ふて、軍人  
等は、海事からいにきく程よわら軟は義と、高貴の  
じらひ強きがゆゑりく生れども、おきんとす  
とかく、おほびやうりやう、勇氣をもととせし堅忍  
たりとあり、とどめがたげてなくとも、そぞれりば  
事ごとめて、ざひと般く敵生の心をもてて、ひよひ  
うしたそだの人生故生す所をもとげて、生氣消え  
されがまくても、其處の所があさまりて、生氣消え  
きんりへゆるべからず。

文治のころ修業中の住人や子どもたちより手紙を

因ふる室池の筋木をれり筋玉と  
わるねぐくり筋玉とれり筋玉と後日  
もあへり、けやまわひうきれど檜皮屋は事と  
トモギスセキシテグニシヒヤクシキリモカム年  
の七月阿房アラカミヘセトと歌んひむ

移はゆぬとやせとあとありそり裏筋林志うろ  
きりふかのめうるふたまくらかとすとひ林がり  
タリげせれうへ生尾とへありて木にまよひくかく  
さげくあくらんとあくらうづえひさく下へと歌ふ  
くびくせきりせきりせきりせきりせきりせきり

古今卷二千

〇十六

半れやうとゑみそんとあひく遊ものびどとくれ  
うのむか居るかくとびとそれといゆとむぢ  
くらざれどあやれてかどりてとくわがみれ  
じのふたかと形とくとくとくとくとくとくとく  
くとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく  
のあそそだらにやぐくらあも萬うりふきりとく  
よりそすをから川とあくら女根とくとくとくとく  
差あとあくらうくゆもあとあくらうくゆとくとく  
まれとけざとつととせんじらうとくとくとくとく  
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

づまへまづするけをばに毒虫がそれとあひすか  
りんやおちふかひくとやうねば威勇とあひじれ  
ましりてよきよりけづまへ

假想は體みは嘗めうる事無事とぞいのる源三郎萬  
千ヶ島が老松れ民もとつぐの馬免が時ほ嘗と假想  
うるにりをあけとむまゆてをさうが年久リかくそで  
えれれてうりてゆうの爲わきうんそくう所れをす  
てゆきうにたかりうらかくまきりぬとまくうせん  
ゆくとおとれ小行廿二年以もとすまくせん  
てありざるへとゆけば嘗建立代年紀とうぞかく

古今卷二十

〇十七

六十年小なりふきりのみのりくおつけくきあ  
ら葉てまきる余ながこねと御と幸と地の  
まきるの裏板はわがくがだきとくと御と幸と  
そそくあくまきりきりいぬかわうちが内うは  
そハゆきくくけあがゆりきく

該國僕人あよてゆうるが富とくとくとく  
てあくちくくじのうゆくとくとくとくとく  
ある向風れくいづくあかきくとくとくとくと  
徳力とねまくとくとくとくとくとくとくとくと  
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

好いお年へうとうねがの年のぎりでえじあふと  
えねむしわれた種とみて極もあゆよくと  
あらわいがねのとわばつうなみをうづりうづ  
あわとりあけくとむれぬるのとせめやせれ  
あうごゑあがるがみれねむとくにうづりみ  
まくとむかがわくとみえんれんうづりとくと  
えづねいとゆくとみえんれんうづりとくと  
本のやうだんとておうせきうさうがんに済すれ  
うゆきわくとせうりとひすくざうそとく  
うゆきわくとせうりとひすくざうそとく

古今卷二十一

○六

居ておもてのく程もあくまでも一死病ふ事  
きり多く療治され候へるがゆゑにそれなりに  
ておよそうらぬ生へ下落せんあらずれおもての  
りおひきのうすをめぐらぬむる是ハ吉年うらに  
あくまでおもとひくはつてくわざのものあ  
くまみもあとめど事とばす事とま  
えよと人を維護の法をよりぞれに活用し  
のよよたすり様おとをさうがの様男のうり  
かのとゆてうじうて走り立のうてゆうう  
人わくともかくられんとされ事あらま

てひ袖くる猿のくらしをかうらが山わく  
猿のあとつゝさとり猿ねもとだれどもすくふ  
てわれど鳥はすまつきてうみのがりて因と  
えをさう財猿鳥の是はれをとさわざにさり  
三財猿の猿ニモ坐りてちたぐくはれをくされ  
ゆき材イギリ鳥もびるんとすれとねだ根をて  
川をめぐりて鳥と水よりほくぐくれをとれて一  
走を今二走ハ川より奥でうきの鶴つひ  
さるはみて奥深さをれとあけたもや脚とくもあ  
よりとさくは鳥ハ水よりけのをれとれとくもあ

古今卷三

○十九

さくさくされく猿をハサすとくのゆゑさり  
やさきなり一あさまのあくろえくとくとく  
よへくろえくとくとく

主は半陰半ぬの都よアヌボトヌモうたがる  
猿とくひかりぐんのとくわ法猿かんとくくと  
こ静て財猿をさう財の猿よじのうかなが  
人かくせんそ経の大經よ財猿をじくとく畜生  
の身口すりとくひくねくとくひくねくされ猿うらは  
てゆとうかん口をもとくをたかてあらんが  
くても秋猿をせみきり飼よもくいれたすば

引方ともうべくやくじ猿他のかくれてぞり義人  
たりやくみ白面もりするをばくひきるる風ふ先  
をんのまとねもとえきうひぐれにてうなすを  
んと鷹のあひておといふ布主義とあてゑを  
術ようてあひぐとせんきうするをもどれ  
のうひばれけりさうとすめ遊て是事  
猿さうとせんはえそんじきの山れどもがゆを、  
まきれどもれりあそび人と山にされども山を  
主君の沖をとへてはみ中放童をのむけるてのり  
てりつきとあそぶれどもうふくうて遊てりよ

古今卷二

○二

もやるとのこがくさうとよじらひよれりよ  
るまくまつからまくほとうりかんひくまじよ  
てまくよとどむとと一きるわうる生返て春  
さう人へじは音海ありのまにとれんうりかうて  
猿とれんせんれんとれんりくねれんとせん  
でくはるぬ一音とくとくとくとくとくとくとくと  
のうちねざしとくとくとくとくとくとくとくとく  
れきとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく  
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

どぬうりその様見らしとてかすり人なり  
半人島山店司波角がうれい半代のひせん  
ゆきよと在に二年壬戌年

建保のほか新宿川を走るまきう湯といふ

峯のまくはり取つて居たるは三足半加地東  
まきぬけまぐり御すの音入よりおもろく  
あひくいとせまごせくるあるは瀧うるおまうきりよ  
早とがお車ともまづきよじりとお車を  
穿くば女仰りがそれまかくやまくあくめを浴  
のあえうる城守のうちよも入るあくまばあ園を

古今卷三十

○二十

てどしてひかわんと云ゆてひとりまくより  
風湯を元のまふくに入らむる程よあしたがくば地  
かくびりくといひめでくすて死ぬつゝさ  
てえられめりくばせんとまくぎりと病見の赤の  
財斗水を湯を入るをつらが傷か癌  
あやややややあまくいとゆめくりあびて<sup>（ひざ）</sup>陰をと  
うびくいのうもろにうちあむれ盡病みあ  
せそいにいのうもくすて<sup>（ひざ）</sup>大病までりくひ今  
まきぬけつるまえぐこまくとがとくと  
とくやうよひへうるのゆきればよめこと

といひをしてよが命をばほつゞとひのて食で  
さうらゆてせりも身代えまきだらうものやけろ  
またうばはれやされうをうを刑限ミツルもやがて時  
うらうのやうきうらしやくめりをうをうれま  
うぐ人のもあざまく

某人今年の夏秋から武田を仰伏せ露河をほる  
れすをもて猪と一きりとめしる猪と町中マチノ追がて  
廻マタタク木村さうの三足と三足とばのとどりほ  
てぎりを猪たとめよゆりそいと猪とばつかまとも  
あゑ死するうかた死すうきりに一の猪死する

古今卷三

○三三

猪と猪しくぬもりても猪よりひよひて猪  
乞も死よきりとめのびあきじめてもきりわてくじん  
おりきる者へ石人として武田がわがりありも猪  
ふがをくきて廻マタタクとめしとぞめしと

又因み角のくの猪ハグロと一きりに大猪オカヒと  
追のびせりとあまくとあまくとも猪ハグロびとまくと  
ねと理ハナシある神カミと人ヒトの猪ハグロあやしも猪ハグロいと  
射アキラシてまくとめしとあまくに猪ハグロあやしも猪ハグロいと  
されどもあびされうる人ヒトはやりて又もがた猪ハグロ  
麻マ走ハシてうきりあの麻マと紺ハラシてこれをもすきと

さへなまくらへよつて席とばやしと村とほ  
てぎり橋とばゆをすくにそれとすくんで射てぎり  
伝ふれくじ本のじきんはちゆゆうとそせんね

その處の御前は平野の酒といふやうな御前  
は圓梨御先との傳説の御先が又ある  
さう牛糞とて御前はもと本郷をもうめた  
るまでまあで御前もと本郷をもだんおも  
うひう實と人をうそつて御前もと本郷をも

古今卷二十

〇三三

かくのうめうとうじゆりと多忙ありせしもと  
とくじ手荷尾わのうひてそぞきうれいは静よ  
くうめうきの先生の所とて縛のやぶの畜生なよ  
へよきうみやありれ加え

賀と云ふ在府<sup>アリ</sup>上の附牛大納唐人雑帽<sup>アマハコ</sup>を云て  
紀伊守安喜<sup>アシキ</sup>が<sup>アリ</sup>の事<sup>アリ</sup>といひて御子<sup>ミツコ</sup>に之を  
あきらめ<sup>アシム</sup>すりやも一<sup>ヒテ</sup>か死<sup>マタニ</sup>よりと云ひて云ふ  
との先例<sup>センス</sup>も作<sup>スル</sup>も云々<sup>アリ</sup>多氣<sup>タカ</sup>も左近<sup>サトウ</sup>のと云ふ太範<sup>タバン</sup>  
脚氣<sup>タガ</sup>脚光<sup>タガク</sup>などと云ふ

文選

二條中納言室主は故生食すよまの時二条  
室へお難縫でのりまへる御ノ事にてよりみ作らる  
八月の御生太年一きのりも

ミヤヒのせんもやうとせ

かく

わあれせひまひきゆめ

うてひうてりら月のまぬ

まぬに御縫ひまれひよどりなまのとひが成  
五島の侍後もまづ一きうてくさりありきを  
うり身ゆるとてくやまくまもとむらもやくり

古今卷三

○三十

うきれぢうだむまのとをくらとくら  
つをけりきる

そーきくとくられけとかく縫く

なみかきとくとくのうもく縫

みうとびくじてくぞえくざれくばく一せ  
とくまぬに

あれす又秋のうれしきあまれぬ

そまたうりぬきまのうもく縫

後久我を政大臣めよかとあがくし鶴のふきを  
御縫にあらせくきうとくばく一あがくつこと

捨ひなれどより多くつりあり  
いたさん山ちばすもかにあは  
きの神さめよあらへとく  
まかをうつひよつてとくときをりきふ  
くわうせんりだよとくや  
ニ奈津浦をすまひいぬとおはしにけりと  
さううそとくとく

いぬかよ浦あうまーとくあはきそ

ひのこじとくわばくら年

後湯川代内侍の時西下人あ重丹波國

古今卷三十

○三五

出巖修業<sup>いのへん</sup>をのあめにうざうざう時くすて  
うやよ山ありその山よりびきくわひあは  
城守くあよ浦うりぎり或山うれむとく一食  
してりうきるふ伴の山よりやまとくい地あり  
もくニ天あまり計へぬうびとくいテの事  
みめりて大口ばわうてのまんとあまうまくま  
さひあげくきたくとく本がさうおいていた  
ものうづくまほ<sup>ほ</sup>本うづくまうりせよ  
枝のうきうづくまじういすかべへうりかとねえ  
じうひ財うちかくえうとぞまうまくおりまう

あ董ふがんよへいめを退すと西入り  
りつとひそてためくひそもんぞとめいく松まよ  
えくとぞなりもかくをかてくの神山づく  
おうされくうれくひよこきよ木と山がうち方  
とおく、三うみせ川を後帝<sup>サハ</sup>のりりうそ東  
くうるぎり

安身の法<sup>シテ</sup>あお先<sup>ヤノア</sup>曾<sup>アシ</sup>傷<sup>アツ</sup>の<sup>アシ</sup>レ本<sup>ヒトシ</sup>是<sup>シテ</sup>御<sup>ミタマ</sup>  
聖<sup>セイ</sup>人<sup>ヒト</sup>墨<sup>モリ</sup>一里<sup>イリ</sup>をうるをあれすあへりくらゆう  
もぞゑれ大<sup>カ</sup>玉<sup>タマ</sup>とひよ人<sup>ヒト</sup>を奥<sup>アシ</sup>といふてうが  
わうききうる奥<sup>アシ</sup>の<sup>アシ</sup>モウリひりて尼<sup>ニ</sup>あたにみ

古今卷三十

○三十六

鷗<sup>ハヤシ</sup>の<sup>ハヤシ</sup>の<sup>ハヤシ</sup>歌<sup>ハヤシ</sup>あと<sup>ハヤシ</sup>に<sup>ハヤシ</sup>び<sup>ハヤシ</sup>て<sup>ハヤシ</sup>せひうせれ<sup>ハヤシ</sup>候<sup>ハヤシ</sup>  
あく<sup>ハヤシ</sup>候<sup>ハヤシ</sup>あら<sup>ハヤシ</sup>り<sup>ハヤシ</sup>うき<sup>ハヤシ</sup>に<sup>ハヤシ</sup>つや<sup>ハヤシ</sup>と<sup>ハヤシ</sup>あく<sup>ハヤシ</sup>て<sup>ハヤシ</sup>そ<sup>ハヤシ</sup>く  
の<sup>ハヤシ</sup>福<sup>ハヤシ</sup>す<sup>ハヤシ</sup>と<sup>ハヤシ</sup>川<sup>ハヤシ</sup>あ<sup>ハヤシ</sup>せ<sup>ハヤシ</sup>お<sup>ハヤシ</sup>き<sup>ハヤシ</sup>り<sup>ハヤシ</sup>と<sup>ハヤシ</sup>あ<sup>ハヤシ</sup>れ<sup>ハヤシ</sup>で<sup>ハヤシ</sup>  
わ<sup>ハヤシ</sup>き<sup>ハヤシ</sup>る<sup>ハヤシ</sup>か<sup>ハヤシ</sup>れ<sup>ハヤシ</sup>す<sup>ハヤシ</sup>へ<sup>ハヤシ</sup>と<sup>ハヤシ</sup>ス<sup>ハヤシ</sup>鷗<sup>ハヤシ</sup>よ<sup>ハヤシ</sup>前<sup>ハヤシ</sup>ま<sup>ハヤシ</sup>ち  
くて<sup>ハヤシ</sup>島<sup>ハヤシ</sup>の<sup>ハヤシ</sup>物<sup>ハヤシ</sup>を<sup>ハヤシ</sup>と<sup>ハヤシ</sup>え<sup>ハヤシ</sup>る<sup>ハヤシ</sup>う<sup>ハヤシ</sup>か<sup>ハヤシ</sup>ひ<sup>ハヤシ</sup>て<sup>ハヤシ</sup>前<sup>ハヤシ</sup>付<sup>ハヤシ</sup>  
も<sup>ハヤシ</sup>え<sup>ハヤシ</sup>は<sup>ハヤシ</sup>う<sup>ハヤシ</sup>や<sup>ハヤシ</sup>ね<sup>ハヤシ</sup>と<sup>ハヤシ</sup>や<sup>ハヤシ</sup>ぐ<sup>ハヤシ</sup>に<sup>ハヤシ</sup>す<sup>ハヤシ</sup>わ<sup>ハヤシ</sup>先<sup>ハヤシ</sup>の  
そ<sup>ハヤシ</sup>と<sup>ハヤシ</sup>福<sup>ハヤシ</sup>と<sup>ハヤシ</sup>の<sup>ハヤシ</sup>や<sup>ハヤシ</sup>ん半<sup>ハヤシ</sup>曲<sup>ハヤシ</sup>と<sup>ハヤシ</sup>に<sup>ハヤシ</sup>姉<sup>ハヤシ</sup>ご<sup>ハヤシ</sup>  
と<sup>ハヤシ</sup>お<sup>ハヤシ</sup>ゆき

家<sup>ハヤシ</sup>内<sup>ハヤシ</sup>に<sup>ハヤシ</sup>う<sup>ハヤシ</sup>の<sup>ハヤシ</sup>ゆ<sup>ハヤシ</sup>と<sup>ハヤシ</sup>益<sup>ハヤシ</sup>歎<sup>ハヤシ</sup>代<sup>ハヤシ</sup>事<sup>ハヤシ</sup>あり<sup>ハヤシ</sup>き<sup>ハヤシ</sup>小<sup>ハヤシ</sup>

もじりのをふにへばかほくをとめりきるよ事  
漁よみびくもすびづは松よて船へまくも松代  
屋よらひき尾もの松がくもじりのをふるせ  
わんよむだに船みてうゑぐらむとまくうれ  
うえみまごねをかへ又船のきばうらのどく  
もあくそへめぐくよひうれどもかねくその成  
えぬ小曉よのぞみて又日代りてあげくらむとめ  
のゆみ少尼せしくまよそうくみとく座ぐ  
うせよきりがどろきわざみてそれうちうだくか  
とばくづきうきりえとおま悟光とのひーりの

古今卷三

○平七

と魚うり漁ばやうよ養ふとてとまくらうるよ  
あくめうりはまうとくいとくあとくのけまばく  
着ゆとるゆにとそじさんのみ

寛永二年冬の佔<sup>タス</sup>吉陽<sup>ヨシヨウ</sup>の南<sup>ナム</sup>北<sup>ヒム</sup>の海<sup>シマ</sup>  
搬<sup>ハラフ</sup>教<sup>キ</sup>半<sup>ハーフ</sup>のまうて方<sup>カタ</sup>さうてくひあひうひうがい  
ぢうよかくまくきりえもくちくわくまくまくせが  
せうわう者<sup>ハヤシ</sup>くまくらあくまく一<sup>ハーフ</sup>あてそゆく  
あげ入<sup>ハリ</sup>うきるにす<sup>ア</sup>とゆきるく車<sup>カ</sup>行<sup>カ</sup>くらもく  
もえのまんたせびとけうくふきりまけの者<sup>ハヤシ</sup>

代りて又あしぎり廻るも地のまゝ  
ありきりや

まにも御付仰れりやと代りを知らかの  
まごうさんの中の心あり絶毛なりふれらるる  
とひそびたすみ十八日廿七日見小こ度いが  
も奥もれづいとひそびうへわやもてて  
とくめなれだむくさうきりす有十日いわ  
報者の通じあはれど高生かねんわきもすも  
ぬ一木セ日ハ何れようくわづかくおぼつか  
もとくわんせじだりまづあまがうるる

古今卷二千

○二千八

との民ア燃がる息の下垂りひてまつまき  
ぐんの中堂そのうとうをせざりの月忌廿七  
日アもさう成りまわしてからざるやあり  
やうがゆへ佛せ葦蓬の宿日等よ主君月忌  
とすきばれとはうする半人佛のゆゑもあり  
ごれ半身てけよりうひある大高生のゆゑ  
きんとわりがつにす

又詔スル中丞主陽和又左馬尉卒役政との小失のま  
らぬるえどうひそび月の十八日廿七日被断  
食とおんしがる奥多のうびよふさづきよ

あはれうらさうきうあきすもあはれうらの想歌で  
トまかよやうさふありうる事へ  
伊勢毛別保と山家前形アシ浦大瀬御下り  
うちさうに浦人日暮に網とりうるゝある日大瀬  
勇とくらん人はやうみて猿よにうきう多く  
うきうづくばにまきて猿よにうきう多く  
のうれ奥とくらきうと云々のうきうとうきう  
テノトモのうきうと尾を波つらみをひれ  
てぐり人れちくうきれたりくわめくと多人民と  
一えふうごばうれも人ふううべをどら寝おぎや

古今卷二千

○二十九

ニ唯とばぬ空御下れりそり一宿と浦人  
クヘされど浦人射切くひとぞうれたまく  
てくふえのわらうひとよりうるゝと人勇と  
りあらうあれとのねうらゆ

みち氏く小田村の郷の住人三九をかーとをまた  
おきはつひひをがもばかとてじがくゆうきうふ  
わらぬまとくらきうよぎも一ほびゆうきうふ  
モとくとそりうされどもやまうだせとりふか  
里すまちと一ほくとてそくとてさうらうえ  
とがえざるよくあらううねも浦の萬の萬

いとおゆめこまつらのうやくまつらは  
さめぐとまつらのうわやくとほ人のくわが  
とゆきれどもかわくぬままで見るわゆりを仰  
めよ。うわれだらうとあらへゆるうがびよ  
じてありてうきやくじうのかよろそよがよ  
きく人ゆき。まことに一巻の手紙をえてく  
くさりあがり

日うるわくまひに抱城わくぬまの

まあと、それのむらゆくう、

わりぬうくのやふがくに中一日あひて候

さんぎれだえぐくろますのあうれくくわが  
もくめてつまくくわきて返りてまきりあれども  
あるえやくくじとゆてあがくとせり。の和  
前形アホ浦仲統御下うけよ見候

天鵝の法事と人のゆきりあひれ鶴と鴨と  
くりきりすよあはうけきた。肩づきまく  
きうその鶴りうごくうべうをあり。されどいりか  
りのねすくくるやんとまくあききされども  
只つともみ日シリみては鶴御事かぎりそのも  
みくく飛鳥うきる代の中うきて見きく

うへりん書てりきる

かまくとせめうりあつてそぞるゆの

ここのうちとくへりゆの

大津のあめれりうる日ありての天道と  
さりきりにわくてあげ歌をじらむよ  
めりうきの後とて源津法<sup>えんとう</sup>やよみがる

ふろすいそろひみをすりよされ

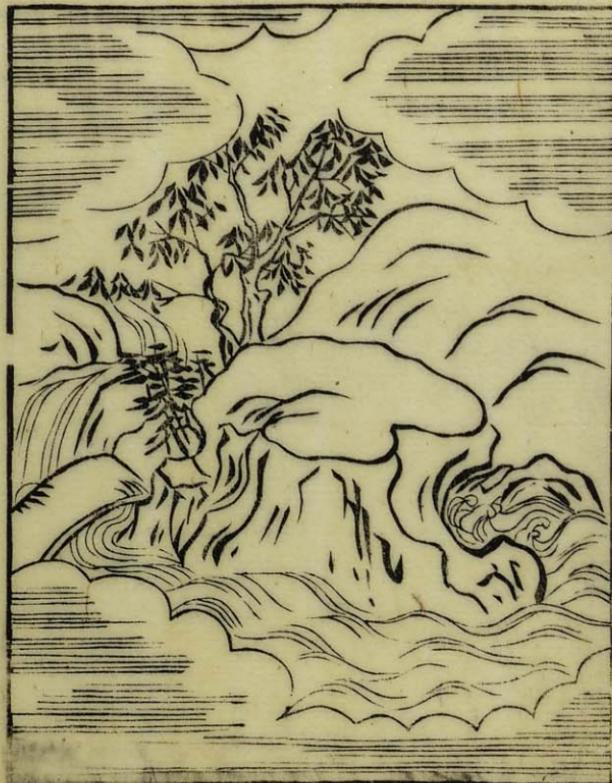
つち阿<sup>ア</sup>けとくいはるん

足利をもへた義氏<sup>ヨウジ</sup>や下美<sup>シモミ</sup>御<sup>ミコト</sup>より様とまくさり  
きりまくらえといとまひりへたお軍<sup>カ</sup>はる

古今卷三干

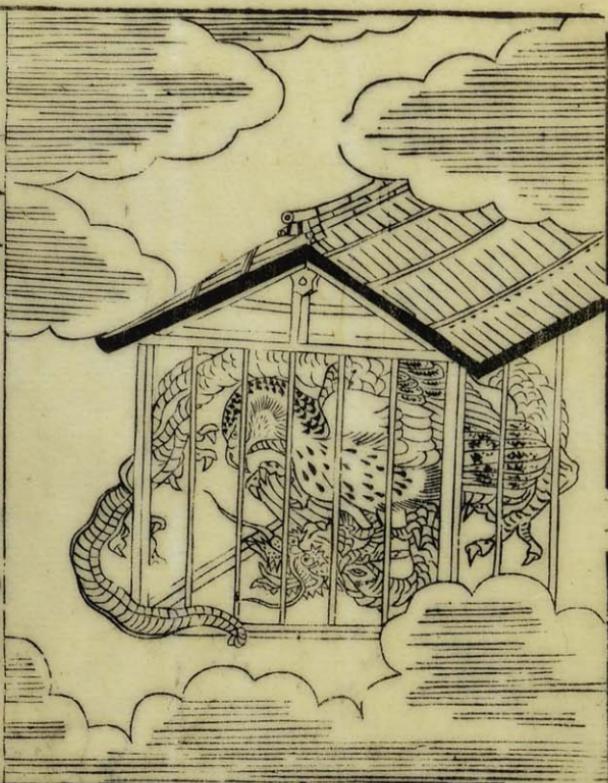
①三一

よへりうれで前<sup>マハ</sup>神<sup>カミ</sup>も先材<sup>マツ</sup>よつておせられ  
まうせききりよ誠<sup>マサニ</sup>よも與<sup>ヨシ</sup>ありて御<sup>ミコト</sup>三<sup>ミ</sup>そり  
さんん<sup>ミ</sup>あひてきこどくゆよまうにまうせり鳥<sup>トリ</sup>  
帽<sup>カスケ</sup>と<sup>シ</sup>そりそりと<sup>シ</sup>そりのそくにまくと<sup>シ</sup>そり  
さくもひせめをさればよ下<sup>シタ</sup>國<sup>クニ</sup>有<sup>リ</sup>て奥  
ト<sup>シ</sup>そり<sup>シ</sup>年<sup>イ</sup>もくはくね<sup>シ</sup>と<sup>シ</sup>徳<sup>トク</sup>ひと<sup>シ</sup>と<sup>シ</sup>を  
ねうどりひに<sup>シ</sup>もおざりき<sup>シ</sup>と<sup>シ</sup>徳<sup>トク</sup>ひと<sup>シ</sup>と<sup>シ</sup>を  
ざくわく<sup>シ</sup>と<sup>シ</sup>徳<sup>トク</sup>ひと<sup>シ</sup>と<sup>シ</sup>をきり件<sup>ヒトシ</sup>の様<sup>カタ</sup>や<sup>シ</sup>お  
村<sup>シラ</sup>あづりて<sup>シ</sup>事<sup>ハシ</sup>あると<sup>シ</sup>屋<sup>ヤ</sup>のあつかひ<sup>シ</sup>と<sup>シ</sup>を  
みいへ<sup>シ</sup>と<sup>シ</sup>うきん<sup>シ</sup>と<sup>シ</sup>かせおづけ<sup>シ</sup>と<sup>シ</sup>れう<sup>シ</sup>と<sup>シ</sup>う



古今卷子

○又手一



後第ももせざりきれども金あたるかどりに

まかみ住人をかへとひのきさり男なりが  
とてつゆ様と射さり或日山後もとて大様と  
されどあよ追のびてひきうきうけられども  
そぞう既とありからんとそろが何とかん  
ぬとあのみたれくやすすばくされどふざ  
ぢりきとさめらだをわく比よりからんとす  
とあまるとれいとくはすとれまくと  
まんとあきと二三事ハヌサよつてとめきと  
ちきりうゑびくとれ先代すがくつま  
古今卷三  
○三三二

とりととよ地よがりふきりとれうりうぐ  
舊と紳りととととてきり

旅宿の役志店よとあまうびりなあ地の耳をひ  
とふ時とお取とて人残をやまきりとわふの必  
要とされどいは地がるとあらわれ人間とそら  
てとげうくれなむ経と商住人を看監あひどる  
りあうるのとく角うるを看さりわき自バ地と  
うううにきいのとれだ里人くわすまのひち  
み地と角うるを看さりてくわく地とく  
方といとあ毛とのまえ地小国城とくありき

かくに音ひをうけり何うてば地氣たのまゝのりも  
えすゞよを付ね件の事ひやうともばつらはれ立  
きゆえ行くとば地氣のとどめうら立て  
てのまんとすばらぬう地の御うち下あはすキを奇  
てひきくづくとびりづくづくあれて地氣を御ひく  
ときれいなるが済事に本ほよくまれてよきの重み  
や、まえに一重のうそをありやうおめりありまうハ  
づらよけられぬでうづくびと附氣う地のう  
とくのううふされどまことひうとくとくよきりもれ  
地うせく人あじ事かくうりて村屋のまわび

古今卷二十一

三

一  
ノ  
二  
三

ほ候うりえおよ多款たくわんより人ひととあゆあゆの宿しゆく候まつすと人ひと  
めのとおりきうちきうちをよ作りて候まつとのりをよ  
あそびうて候まつとまもとまもとあそびうそよ候まつ  
ありとよろひをやうのとよあらべあらわとさりあわせ  
そる候まつとわやうをまかへつとまかへつあらはりまくらへ  
じらのうびとゑのたもやりのどもひよ時ゆきをも  
うめりこむとぞととぞあらがくとぞとぞめりう程よ  
ゆるがくとよよさればよくとよくあらげにう程よ  
すうとたぐらぬるやあよさればよくうとよくうびとうび

のをかひきうそであることをいたに成尼は盡つて  
わすれられどそれ人の心よりありてあそ  
まし多きが我はよく人の心とて一毫もよぐれ  
とありみさうをばらひまじゆふすと加て  
ひくよく我の心とてゆゑとあく角びだりと  
詰めく生とくはやびよス存すをかくふ  
ありしかよえむすが、さあ波よくかて今もあれ  
せとゆよ人をとす年はもあすくみて  
るのうぬかれどらひわきくあ、半たわらねま  
て書体を仍と作り修善トてみやびとせび

古今卷二十

(三三)

の是ぎりとくべゆくとくうてばあふうて  
熱ひのからゆくはよくびるな生れくへば  
あくちうひとわられざるむれ建長の御事

あきと今

自納すとくべよくとくよりくよくは  
くうとくあわきくわゆくの者あくへた  
せんと移してされたりりあでくうひよく經  
延祐六年二月二日の承入の傳のせよ會宿と  
てよくうぞえきらひかとこそすに乍あ  
すりあへ代はよきうきばかりやうへまく

リもあきよなれでひを抱のせへとまひて不事故  
すむらへお行を仰くまへされば多くあり身  
すみあた身がうらのものびくうらるまう  
さんざんのひよちやまびらめ身はせりする  
えとすまえのあくらゆまへにけくまども  
もれりそく時よきよてかばぬえくらかみ  
日はうてせりそれくすてくらかく死ぬを後  
じ傍ぐれのねれん身もなるもえかくる五郎  
もむかりきり件のくらあとすば猪川よ取つ  
されぞゑもうりべりまうんまうゆとくやあ

古今卷三十一

○三十一

やあとそめのねりりたるやうて座ぐそうせまざう  
さうけりあそわーきまへ

ほの後身右肩生參れ方こやあだりは被面を上  
人よのせうそかまよあげそくきてけりく  
のあかくちやうど身の生辰よりを終ふ不すく盡  
てゆくまのうじあくふうて中間酒食の後  
奉うりやくやりくうせ作一と達也六年十二月  
廿日是夜の所も二ノのくある前におの富小  
鶴の草より草むらて活日一日内退あり  
あふくちあくとめて轍跡よそをくわくわく

ゑあつうれとえがねゆはれのうとあくふを  
書ておまよづけく佑きり

まよあすをもとめのいわゆらり  
のとけさゆ代のしやどくゆ

おもとお房ふらうて樓城うじてあねづ  
じもびつをうる

まよあすをもとめのいわゆらり

タカヒキ井のうよゑうう井

は半魚直翁称つてゆくやうむとひて  
たけくみれとも

都鳥芳名昔閑万里之跡微會寄跡  
今遂一見起至畏悅之餘謹述心緒而已

前三河守ト部兼直上

まよあすをもとめのいわゆらり

もとめのいわゆらり

りあよ候雙とひあすもまきのうに  
もとめのいわゆらりこれと人かとへこれも  
つれつせとまろぬうすきうねよほるひな  
うそんの所からぬくをたまうてりあくひだり  
あげさんとおのくまくひされぐあだ中せん

てつゆもおげうざうそりあやーをねりあねよあゆの  
めうどきぬぢりてぬわぬじと事ふぎりいとほり  
ぐくに事半がれまきてとくにじにちうびとのふくね  
えうわおどばとりひくもすむにむくもとむにむかく  
てはるわゆうむくみゆくめうふちかねむくめう  
今ひぞくめうふのりてあくたのうがとむちり  
てぎりひくへ入がどくこまをねむだといひく  
めうくらへんむきねくはくよ軍むろてお成あけめ  
ききるにあのうしめうかまきのくめうめく軍  
めうくにあくめうくはくよ軍むろてお成あけめ

古今卷二十

三十七

ひあらんりはざわだ片毛がれくまく天命の氣の  
のぎききりあきりとくとあれよおひひへんぐの唐  
え本あきたりとくとあれよおひひへんぐの唐

楚襄王晉國之子也。豫宋教

楚襄王晉國と云ふて、原來教へるをひあやて  
いそくせのく捨のまのくよ憚の爲めのまんとすゑ  
もとくらえ嬌嬌のくまんとするがゆべ嬌嬌まる  
嬌とのくゆとりてくらえよ苦難のくまんともゆど  
あくび苦難又嬌嬌のくまんとりてあきのあはれ  
うばりく幸子のくまんとすとあくび苦難のく  
苦難のくゆとりてあよ深谷くらえ小海様のあく

事代をひしてあとあるより是れ前割と  
て後害となりぬかへぢり玉げはまうとひ  
らうと音とせんといふはせがへと西にさり  
衛懿公をちりぞく玉へんとめくわりすとせがこ  
きもトをそが表一後そめのあいは  
てどゆるの行かわねぐくあはのせぢと後が  
よ多がとありて玉代やる海と時霧夷のうじに  
ありぞくをりとひくをそく人をうそれどみびと  
船公代あらへて三船ナシハくそのうそく半波の  
うそおへてかうとせされば船公の船弘演とす  
古今卷三十

○三十八

人をよしじてよみがへとてうじてあひ所と  
て取よきり萬そのうきめくや

萬ふ山と毛路よ本城ゆりのとよくがとよく切  
ゆぐあるとだらうとび人の家よみどり屋あは居ニキ  
めくめくめくとびのくとくめくとくとくとくとく  
あは居すと萬すと萬すと萬すと萬すと萬すと  
とがゆくゆくゆくとがゆくゆくとがゆくゆくとが  
とがゆくゆくとがゆくゆくとがゆくゆくとがゆく  
とがゆくゆくとがゆくゆくとがゆくゆくとがゆく  
とがゆくゆくとがゆくゆくとがゆくゆくとがゆく  
あれもありやまくらひり

文集詩

木原一篇須記取 致身杖与不杖間

とありハ毛なり又達士獨り文賦より

在木闌不杖之質 處鴈令善鳴之分

タモトモリス義奈葛庵が毛包すハ

昨日山中之木杖取諸已今日庭前

之花詞懸於人

一  
篇  
ハ  
禽  
獸  
の  
鄉  
よ  
入  
づ  
く  
ニ  
川  
の  
居  
れ  
キ  
モ  
ト

入侍るなり

古今卷三

○三十九

怜人助先府俊將兵の事小毛りたと府の下金  
めりあめりあめり下金うる牠場のどじがりのとく然  
とくじあよわんのとくね中ぞうりまた牠ゑ毛きと  
くらは川み小柳うるぬとハるもすりのあくへ西  
こくへぞうりうるゐと強きつてとく太はとわきて陰  
のまんとく助えとあひを取ぐる家和歌とおひ  
まうてこく歌の篇とおこしと遷城余波洋姫  
大地うすうすとめりて首とたぐりと何せとおひ  
く箇とくとくもとあてとくとくもとうの文集のむり  
されそのくもとけお後経のくとくもとくはおおてとく

まつるねぐろとあけみくはよれどもぬくめよ  
とくとくぬうきりへあとうりあくらぐすゑのまきと  
よりぬきひくくめへあけみくはよれどもぬくめの  
あをさくびくられあきゆせばあわいじくねのまき  
めのまきねあげく森のあらうびとひたりぬくめり  
あれそとくわくぬくめあくねとぬくめ大いへ  
うううれ事もあらう事もあらうがくず  
されぬくれとあらうあきけ城のうじぬくめ  
うううれ事もあらう事もあらうがくず  
うううれ事もあらう事もあらうがくず

古今卷二十

四  
卷

のものあつて、がむひきのて、ぢりかゝひよつて  
まじなきて、ばくとまゆうりをもたらせばさざれん  
うきる本もえあくから本もまだまほん  
うつあゑ郊伐とうら度を玄て亦第二十卷  
とくへ幕れそくごよひてうその車れ起とのく  
つまくよそのわくうりをあくりせり建長六年十  
月十六日さうりれ事はあくとてけく後經の  
無成りとひをうけいび某の云れぬうりれこれ  
あすよりて自承乞人の廉義<sup>ルイキ</sup>の畫郊伐  
うけくもまくよゑくの供物とあく又酒

葉菴の毛筆すまうくまづ席うちもだえて、辛  
菊のちうづき并よね後一候とすみあく御次奉行  
のあとあくせて昌体のかとをあがひよけを擧  
鉢ふ冬ハ東文子の事ニマハかうと謙ぞ鉢  
ハ羽林菊タ小萬葉寔寄露狂とく披瀟早  
朝詠あり嘉慶令月次より奉山不讓土壌泥  
今生世俗の匂あへずれそとひたんことを  
よもくびてすれ野趣の心とて毫裏の負愁居  
りの之次よ一獻の盈残とじ二鉢よ葉の秋と  
三鉢よ郢曲わうそのら教獻よまよふ冬の歌  
あゝ詠さへれやくそろや

折に集におひくは他さんとのりす今御前御縁の  
中には鑒識とひびて國外にゆきととのあくはあ  
ふ源うかくばく鳥の御神うすす駕御跡と加へ給  
まおじ世人よりて許否あつて一事を嘆く思  
惟といふと一鐵菴の蘭うく翁の儀(鐵菴)さん  
よハ間ちきとゆるをべー傳これらの方とくへ當處  
利之非よ御たりもとやす三十巻相能の総論と

之ひるゝへて是八相傳遇の傷國とせん無云  
禪院諸し文佛僧後第紙に教とび信ゆく  
ゆうり

建長六年十月十七日落後胡右筆  
記之當時據雲併之青嵐漠々滿紅蘿  
之殘菊鯉紫交色之研之小泉鶯鶯  
雙翅斜庭之物是動我情者也

曆應二年十月十八日染六旬之老筆  
終二十帖之寫功平旦為休當時之徒

然且為偷後日可傳也可秘藏之

古今著聞集卷之二十終

老來門 在判

文淵三庚午年正月寫板  
時和七庚寅年三月求板

人有極窮乃至斯  
柏原在清溪

大坂書林 同 河内屋文政八

江戸日本稿南壹丁目

須原屋茂兵衛

同貳丁目

三都

同下谷池端仲町

山城

屋佐兵衛

岡

村莊

助

發行

同今川稿南詰

永樂

屋東四郎

京三條通御幸町角

吉野

屋仁兵衛

大阪心齋稿通北久太良町

河内

屋喜兵衛板

同心齋稿通備後町

河内屋卯

助行

書肆